

巴 杏

三次地区医師会報

No.166

令和元年6月発行



外科医のメスに国境はない

～荒瀬秀俊 伝～



荒瀬秀治 著
溝田忠人・溝田武人 編集

はじめに

広島県の県北三次市三次町に江戸時代から11代続いている医師荒瀬家がある。8代の荒瀬一基までは現在の三次市下川立町で開業していた。江戸時代末期には藝州三治郡川立村という地名であった。幕末の先祖、7代荒瀬元安(1835-1899、享年64歳)は九州日田にあった広瀬淡窓(1782-1856、享年74歳)の咸宜園に入門した記録が残っている¹⁾。

私の兄、荒瀬秀賢は11代を継いで73歳で生涯を閉じた。私は祖父・9代荒瀬秀俊²⁾の晩年を共に荒瀬病院で過ごした。また、祖父の生きざまや人となりに関して、その医療人生を通して最も近くにいた児玉ハズエ婦長(以下、児玉婦長と記す。)から、折に触れて聞かされた内容を覚えており、それらを後世に残したいと思う。

太平洋戦争の勃発から約一年が経過した昭和17年12月20日、この町にオランダ人44名が捕虜(当時の正式名称は俘虜(ふりょ))として連行されて来た^{3)、4)、5)}。それ以来、彼らは終戦までの約2年9ヶ月を三次の収容所で過ごした。彼らは、オランダ軍の病院船の医師、看護婦(現在では看護師とすべきであるが原文のまま載せる)を含むスタッフであったに

もかわらず、守られるべき戦時国際法に則らない不当な扱いを受けながら生き延びた。日本の敗戦により、幸いにも全員が母国オランダへ帰国することができたが、三次を去る昭和20年9月12日までの間に起こった一つの事件について、特にここに記したい。

すなわち、彼らの中の一人の婦人が手術を必要とする消化器系の重篤な疾患に陥った時、戦時下の多くの困難の中で、敵国人の捕虜を扱うという大きな障害を越え、人道的な立場で彼らを支え、外科手術を執刀し救ったのが祖父・荒瀬秀俊であった。



荒瀬秀俊(1961)

1. 老婦人から渡された新聞記事と児玉婦長の話

1.1 新聞記事を渡された

私の仕事場、三次市君田診療所に勤務を始めた平成4(1992)年から、恐らく10年以上が経過した2002年頃だっただろうか。ある日、外来に通院する一人の老婦人が、診察が終わると同時に「先生、先生のおじいさんが戦争中収容所で……というこの話、知ってってです?(知っていらっしやいますか?)」と尋ねてきた。「ええ、まあ」と曖昧な返事で応えたが、「すごいことされたんですね、私らの誇りですよ」とやや興奮気味に話す患者に「ありがとうございます」とだけ応えた。そしていつものように「お大事に」と声をかけたが、同時に次の患者が入室して来ており、そのことを考える時間も無く診察を続け、その日を終えた。この老婦人も含め、特に病状が安定している場合、次の診察日は、だいたい投薬に合わせ2週間後が一般的であった。しかし、その2~3日後、同じ夫人が、私に渡したいものがあると来院された。大きな封筒の中に数点の資料、中にはコピーと思われる何枚かを、ホッチキスで束ねている。細かな文字でびっしり埋められている紙面には、関係する部分を赤鉛筆で線引きしたり、囲んだりした作業の跡が残る資料であった。主に中国新聞あるいは地域で発行された歴史に関する冊子などの抜粋で、ほとんどが大戦中に三次にあったオランダ人収容所での出来事に関係した内容であった。子供のころ、荒瀬病院の児玉婦長からも聞かされなかった話や、私が全く知らなかったエピソードなども含まれていた。活字になっているせいか余計に祖父の生前の一時期が輝いて思えた。医療以外のエピソードも含まれており、もちろん児玉婦長が生きていれば、すべて知っている内容ではあったろう。

1.2 児玉婦長から聞いた話

児玉婦長は、この出来事を良く私に話してくれた。しかし私はまだ10歳にも満たなかったもので、興味は殆どなく、聞いているフリをしたり、始まりそうになるとその場から逃げたり、「その話は何回も聞いたから」と、ややひねくれるイヤなガキだった。それから数年後の小学校5年生になった頃、様々な出来事に興味を示し始め、児玉婦長の体験した戦争中の出来事にも、それまでと逆に知りたい、もっと詳しく教えてもらいたいと思うようになっていたが、それまで反抗して来たせいで、こちらからはなかなか言い出せなかった記憶がある。

児玉婦長は21世紀になって間もなく90歳の生涯を閉じた。看護婦として、荒瀬病院と患者のために、尽くしきった明治の女性であった。彼女は、基本的な看護技術及び医学の基礎を身につけ、正看護婦の資格を持ち、恐らく当時としては人数で言えば医師の数より少なかった最先端の女性であった。このまま私は何もしなければ、語り継ぐ人も無く、貴重な話が埋もれてしまう。天国の祖父が「おもしろくないのー」と私の夢枕で言いかねないプレッシャーを感じて、まとめ直してみる気持ちになった。

2. それは戦時下、

昭和17(1942)年のこと^{3)、4)、5)}

2.1 ジャワ島近海で拿捕され三次に収監されたオランダ海軍病院船関係者

1941年12月、真珠湾攻撃により開戦間もない1942年2月オランダ海軍病院船『オブ・テン・ノール号』はオランダの植民地であったジャワ島近海の周回航路で日本軍に拿捕され、その内79名が横浜まで連行された。その中の軍医6名、歯科医師1名、看護師17名(内15名が看護婦)、さらに船長であるタウジン

ハ氏以下乗組員20名(内18名はオランダ国籍、2名はインドネシア人の機関士)の計44名は「非戦闘員」であった。

戦時下の昭和17(1942)年4月2日付けの朝日新聞記事¹⁰⁾(現地発信3月31日)によると、オブ・テン・ノール号は昭和17年2月27

日から3月1日までのスラバヤ沖海戦の際には敵艦の中央にいたという。斎藤、阪本の両記者がこの船に乗船して取材したのは日本軍に拿捕されてマカッサルに停泊していた時である。乗っていたのは、船員182名(のうちオランダ人の高級船員22名、他はインドネ

【名簿2】 第2期広島県三次抑留所名簿				42年12月～45年8月			
抑留所	国籍	氏名(蘭公文書館史料)	氏名(外務省史料)	年齢	性別	職業その他	
広島	1	蘭	Tuizinga, Gerrit	G・ダイジンハ	51	男	船長
広島	2	蘭	Meisenbacher Ulrich August	U・A・メイゼンバックル	39	男	二等機関士
広島	3	蘭	de Best, Adriaan	A・ドゥ・ベスト	37	男	二等機関士
広島	4	蘭	Verhoef, Pieter Jan Govert	P・G・フェルーフ	33	男	三等機関士
広島	5	蘭	Van der Wolf, Dirk Gerrit	D・D・ファン・デ・ヴルフ	41	男	二等機関士
広島	6	蘭	de Roy van Zuydewyn, Charles Anton	C・A・ザイドブエン	37	男	三等機関士
広島	7	蘭	Willems, Louis	ルイス・ウィルムス	36	男	三等機関士
広島	8	蘭	Hendrike, Derk	ダーク・ヘンドリック	32	男	四等機関士
広島	9	蘭	Kuken Thijs	T・コイクエン	32	男	四等機関士
広島	10	蘭	Bakker, Johannes Bernardes Godefrides	J・B・G・バックル	32	男	五等機関士
広島	11	蘭	oost, Pieter	ピーター・オースト	26	男	五等機関士
広島	12	蘭	Stijve, Niklaas	N・スティーベ	25	男	五等機関士
広島	13	イ	Soediren	マス・スディレン	24	男	五等機関士
広島	14	イ	Soedarsono	スダルソノ	28	男	電気技師
広島	15	蘭	Dirkse, Jakobus	J・ディルクゼ	53	男	司厨長
広島	16	蘭	Koenen, Francois Louis Mathieu Getrude	F・G・クーネン	50	男	料理人頭
広島	17	蘭	Sehuur, Cornelis Johannes	C・J・スピニール	40	男	無線技師長
広島	18	蘭	Van de Poel, Johannes Casper Bollmann, Theodorus Stephanus Everardus	ジョネス・C・ファンデポール	51	男	機関長
広島	19	蘭	Mulder, Johannes Jacobus	T・S・E・ポールマン	42	男	一等運転士
広島	20	蘭	Mellema, Andries Willem	J・J・ミュルター	45	男	事務長
広島	21	蘭	Vreedde, Jan Johannes Antoni Arnoldus	A・W・メレマ	38	男	軍医長
広島	22	蘭	Veldhuysen, Adrianus	J・A・フレージェ	45	男	予備軍医少佐
広島	23	蘭	Wempe, Johannes Willem Nicolaas	A・フェルトハイゼン	45	男	内科医師
広島	24	蘭	Van Koeverden Brouwer, Gerrit Hendrik	J・W・ヴァンバ	49	男	予備軍医大佐
広島	25	蘭	Veen, Ruurd	ファン・クーフェルデン・ヴラウアー	40	男	予備軍医大佐
広島	26	蘭	Wiemans, Sjoerd	アーレ・フェーン	40	男	予備軍医大佐
広島	27	蘭	Schouten, Netty	S・ウィーマンス	32	男	予備軍医大佐(歯科)
広島	28	蘭	den Boer, Hermina Maria Johanna Elisabeth	ネリー・スコウテン	50	女	看護婦長
広島	29	蘭	Hoekveen, Maartje	H・E・デン・ボール	44	女	看護婦
広島	30	蘭	van Waning Bolt, Agnes, Elisabeth	M・フックフェーン	44	女	看護婦
広島	31	蘭	Leendertsz, Anna Margaretha	アグネス・ファン・ヴァニング・ボルト	36	女	看護婦
広島	32	蘭	van den Berg, Anna Wilhelmina	A・M・レーンデルツ	44	女	看護婦
広島	33	蘭	de Boer-Gerth van Wijch, Jeanette Margaretha	アンナ・ウィルヘルミナ・ファン・デン・ベルグ	34	女	看護婦
広島	34	蘭	Gunther, Petronella Hermina	J・M・デブール・ナルツ	51	女	看護婦
広島	35	蘭	Mackay, Willemina Johanna	P・H・フィテル	53	女	看護婦
広島	36	蘭	Smaardijk, Johanna	W・J・マカーイ	43	女	看護婦
広島	37	蘭	Vos de Wael, Maria Immaculata, Antonia Ernesta	J・スマルディック	51	女	看護婦
広島	38	蘭	Brouwer, Charlott Geertruida Jansje	マリア・フォス・デ・ヴァール	40	女	看護婦
広島	39	蘭	van der Wolfnee van Bers, Clementine Maria	C・G・ブラウワ	43	女	看護婦
広島	40	蘭	Heil-Zuur, Tilly	van der ファン・ベルス	42	女	看護婦
広島	41	蘭	Smits, Elisabeth Petronella Cornelia	A・M・ヘイルジュール	39	女	赤十字看護婦
広島	42	蘭	van den Bosch, Gerardus	E・P・C・スメッツ	45	女	看護婦
広島	43	蘭	Rekers, Willem Joham	G・ファン・デン・ボッシュ	43	男	看護士
広島	44	蘭		W・J・レーケルス	29	男	看護士

第2期広島県三次抑留所名簿：小宮まゆみ氏より外務省資料

シア人)、軍医7名、オランダ人看護婦15名、患者23名であった。オランダ人高級船員22名+軍医7名+看護婦15名の合計は44名になる。

広島県双三郡三次町(現三次市三次町)にあった元保育園(愛光園)を改築した収容施設へ44名は収監された。日本側の管理は、日本軍ではなくて三次警察署が当たった。非戦闘員として捕らえられた場合、その扱いは戦闘員捕虜とは別に、衣食住など、待遇について配慮がされるべきであった。しかし、一般捕虜(戦闘員捕虜)と変わらない処遇にまでレベルを下げ、更に戦争の経過と共に物資不足の影響もあってひどくなる一方で、惨めな生活を強いられた。彼らは、母国へ帰る日を夢見て、互いに励まし合い、耐えていたのであろう。

2.2 ブラウワ婦人の罹患と日本側への要請

その収容生活の中で一つの出来事が発生した。病院船スタッフの一人、看護婦のブラウワ婦人が、消化器の疾患に罹患していることを、同じ収監者のオランダ海軍軍医により診断された。捕虜であるがため、適切な対応は何一つできなかった。同僚の軍医は、もちろん薬による治療をしようとしたが、病院船が拿捕され、全て没収され、治療に必要なものは殆ど無かった。症状は改善されないばかりか、初期には吐き気だけであったが、次第に食後の嘔吐が始まり、ひどくなる一方であった。

捕虜として収容された病院船スタッフ他、非戦闘員あるいは一般戦闘員捕虜も含め、処遇については国際法上の規約により、彼らの健康管理のため、月に一度、日本人医師の巡回診療が義務付けられているはずであった。ところが収容されて2ヶ月間は巡回診療が行われたが、何か理由があったのか、その説明

も無いまま、その後一度も医師巡回はなくなった。彼女の状態は、発症初期に診察され適正な投薬が為されていれば、治癒が可能なはずであった。オランダ人軍医は日本人医師の往診を繰り返し要請した。しかし何の音沙汰も無く経過し、せめて薬だけでも、との要請を収容所職員経由で日本軍関係者に訴え続けたが無しのつぶてであった。患者の病状はさらに悪化の一途を辿り、主に栄養状態が悪くなって、このままでは危険であった。オランダ人捕虜の医師の判断では最悪の場合外科手術が必要で、日本人医師の往診の要請を繰り返したが、いっこうに医師は来なかった。約2ヶ月が経過する頃、ついに彼女は口からの飲食物を全く受け付けなくなった。著しい栄養障害と脱水状態が加わり、危機的状態になった。猶予は全く許せないところまで来ていた。

この最悪の状態に加え、時折意識障害が発症するに至り、外科手術による治療が残された唯一の方法と診断された。診断したそのオランダ人軍医達も10kg以上も体重が減少していた。患者の肌はロウのように青ざめ、徐々に明確な意識障害を伴い始めた。緊急の手術を行うには、兎にも角にも日本人医師に診察してもらうことが先であった。そのため焦燥感がつり、普段の彼らの振る舞いが、次第に荒々しく変化してきていることから、収容所の職員達もただならぬ状態であると感じ始めていた。

2.3 「ブラウワ婦人」の状態について

オランダ人軍医は『胃の幽門部狭窄』と診断した。この幽門付近は、健康な状態であれば、ゼン動運動により、食物をスムーズに胃から十二指腸へ送り出す部分である。しかし、そこは胃潰瘍あるいは直結する十二指腸の潰瘍も好発する部位で治療に難渋する症例も少

なくない。胃潰瘍に適正な治療が行われない場合、最悪の場合、潰瘍が深くなりついには穴があいてしまう、これは「胃穿孔」と呼ばれ、重い腹膜炎「穿孔性腹膜炎」を合併しうる。彼女もまさにこの状態に近かった。細かな経過は不明だが、人の潰瘍の多くはストレス、つまり精神的、肉体的に過酷な状況が原因で、この患者についても過酷なストレスに晒されていたことは想像に余りある。

2.4 医師は来たが一人目も二人目も無言で立ち去った

彼らの熱意が通じたのか、待ちに待った日本人医師が収容所に往診に来た。これでやっと次のステップへ進めると迎え入れてみたが、ベッドサイドまで足を運んだドクターは、何もしなかった。治療どころか触診さえせずに、一言もしゃべらぬまま踵を返して部屋を出て行ってしまった。おおよその症状くらい

は往診の前に聴いていたはずである。消化器症状を主訴とした疾患を診断する上で、腹部の触診は、絶対に避けては通れない基本的手技である。指先による触診は言葉による説明より何倍もの情報を医師にもたらずはずである。にもかかわらず、それすら行わず出て行ってしまった。オランダ人医師は、それでも何か進展すると期待し、対応を待った。間もなく二人目の日本人医師が患者の元を訪れた。しかし、捕虜たちの期待にもかかわらず、二人目の医師も全く同じで、何もせず出て行ってしまった。

2.5 事態はギリギリの所まで進んでしまった

その後、何の進展もなく、時間だけが無駄に過ぎ、患者を見守ってきたオランダ人軍医達には、その時点で既に手術のタイミングを逸したと思えた。言い換えれば『手遅れ』とも言える危機的状態にまで陥った。しかし彼



旧荒瀬病院の往診などに戦時中まで使われた人力車。

下川立町の荒瀬病院に置いてあったものを回収して荒瀬外科医院に展示（小宮まゆみ氏撮影）

らの訴えも日本軍の上層部に届く可能性はないと判断するに至った。彼らは、非常手段に訴えてもこの状況を打開するしかないと追い込まれた。もし病院船の中であれば、潤沢な薬剤があり、緊急手術には手術室があった。そこには器具、手術用ベッド(手術台)さらに无影灯等があり、そして成功させるために最大の要因である医師、看護婦等スタッフによって100%の対応が採れたことだろう。しかし、この収容所には自分たち医療関係者がいただけで何の手術道具もなかった。この見捨てられた状況に、オランダ人軍医および医療スタッフおよび病院船スタッフは、いよいよ自分たち自身の手で手術を行わなければ彼女を助けることは出来ないと考えた。

2.6 日本人関係者も同情の気持ちを持った

彼ら全員が、収容されたときに比べると10kg前後の体重減少になるほどの処遇に耐え続けてきた。近くで見えてきた収容所職員の日本人の関係者にも、いや最も近くで見えてきたからこそ、いまや彼らを助けたいと願う気持ちが湧いていた。いつしか立場を超えて、同情の気持ちが生まれ、変化が現れ始めていた。児玉婦長の懐古談によると、そのご時勢にあっては、あからさまな同情の言葉は言えない。そのようなそぶりがバレただけでも罰を免れない時代だったと、収容所と関わりのあった人が、当時の気持ちを話してくれたそうである⁵⁾。

日本の協力が得られなくても、オランダ人軍医達は、自らの手による開腹術が、速やかに行えるよう準備を要請しようと考えたが、危篤状態の患者を助けるため、考えている時間はもはや彼らには無かった。目標を見失いそうになる気持ちを奮い立たせ、日本の軍関係者の高官に直訴する決意を固めた。

2.7 手遅れ寸前で船長が採った覚悟の一策

二人目の日本人医師が何もせず患者のもとを去った次の日の早朝、その計画が実行された。実行した病院船船長のタイジンハ氏はクルーの一人だけに、自分に何かあったときのため、これからやろうとすることを打ち明け、仲間に後を託した。夜明けを待ってタイジンハ氏が行動に出た。それは、収容所を囲っている板塀を、破壊するというものだが、単純で危険かつ幼稚な計画に思える。しかしこの計画を立て、自ら実行したのは病院船船長の大佐であった。単なる反抗の意を現すのではなく、患者を助けるための最後の作戦が開始された瞬間であった。その行為は即座に見張りに阻止され、三次警察署の地下の独房に24時間留置されることになった。確実に要求を伝えるために、スマートではない方法であるが、最後の手段として危険覚悟で打って出た時の気持は想像するに余りある。

船長は、社会的にも高い地位にあり、専門分野はもちろん一般教養にも長け、この病院船においてはクルーおよび医療スタッフ全員の代表者である。そのような高い地位の者が現行犯として逮捕された場合、日本の対応もそれなりの地位の者が取り調べにあたる可能性を考えての行動であった。この取り調べに際してこの地域の日本軍の高官を引き出すことに成功した。

想像の域を脱し得ないが、状況を考えると、彼らの要求は、真に「同胞に手術を受けさせたい」と言うものであったろう。しかし、訴えを受けた日本軍は、施設や医師を確保するだけでも、当時の状況から難しかった。例えば、同じ要望が、大きな都市、例えば広島市であれば、可能な施設として広島医専の附属病院外科に協力を求めることもできたかも知れない。しかし患者には、70kmの移動に耐えるだけの体力は既に残っていなかった。人口

も二万人に満たない広島県北の『三次』では、オランダの捕虜からの要望を充たすことは相当困難な問題に思われた。

2.8 収容所の患者のことが児玉婦長から荒瀬秀俊へ伝わった

この切羽詰まった状況がどのような経路を経て祖父に辿り着いたのかは、今となっては知る者もない。幸いなことに、その捕虜収容所は、日々の診療に追われていた祖父の荒瀬病院から、350m位の近い場所にあった。収容所から開腹手術を緊急に行う必要のある患者がいるので、手を貸してもらえないものかという依頼が婦長に届いた。軍からの要請を、祖父に伝えると、祖父はすぐに往診の準備をさせ、速足なら4分少々距離にある収容所へ往診鞆を抱えた児玉婦長を伴って向かった。既に連絡が届いており、憲兵が最敬礼で祖父らを迎え入れた。

児玉婦長は、傍らで無言のまま祖父の一举一動を観察するオランダ軍医長ともう一名の軍医および看護婦長の三人の視線を感じたそうだ。明らかに懐疑的・敵対的であり、時折小声で何かをささやき合い、猜疑心を隠しきれないように見えた。軍の通訳から外科医であるというぐらひは聞かされていたとしても、自分たちが執刀するつもりであった彼らにしてみれば、何より急いで手術の準備をしてほしい気持ちが、優先していたであろう。4～5分だろうか患者がしゃべれる状態ではなかったため祖父の無言の診察が終った。実際のところは、患者であるオランダ人看護婦はその際、100%意識消失の状態ではなかったが、初対面の日本人の医師が何者かもわからない恐怖感があった。一種の精神的防御とでも言うか重症ではないふり、例えば「痛い」とかある種のうめき声のような反応を表さないう精いっぱい演じていたと後日談に記し

てある⁷⁸⁾。条件を整えばすぐにもでも手術を始めたいと言う彼らの要望通り、見るからに相当重症である印象を祖父は受けた。オランダ人医師や看護婦が、祖父について、この人が誰で、何者なのかを尋ねたらしいが、通訳は意思疎通に苦勞している様子が祖父にも分かったようであった。祖父は横たわる患者を前に、大きく深呼吸した後、診察し、ベッドサイドで見守る二名のオランダ海軍軍医及び総婦長等に視線を向け、「私の病院で手術します」と言い放った。祖父の言葉に対し一瞬の間があり、彼らの戸惑いは隠せなかった。しかし、ここから少しずつ流れが変化してくる。祖父は彼らに向け直接英語で話しかけ、同時に児玉婦長へ、すぐ荒瀬病院へ運ぶよう指示した。横たえたまままで運ぶため、救急車もストレッチャーもない時代、使用したのは布製の担架だった。

2.9 手術への立ち会いもOK

収容所での劣悪環境に加え、こと医療に関して裏切られ続け、挙げ句の果てに仲間を緊急手術の必要な事態にまで追い込まれた彼らであった。初対面の日本人医師の説明を聞き、その内容が寸分違わず彼らと同じ見解であっても、祖父の執刀をはたして納得して受け入れたのだろうか？祖父の話に対し彼らの表情や態度は猜疑心に満ちたものであったのは、致し方ない。立場上、祖父の執刀の申し出に、うなずいては見せたが、同時に彼らは「手術に立ち会いたい」と強く求めた。それに対して、祖父はあっさりと、当然そのつもりであることを告げた。「まあ、わしに任せておきんさい」という彼の絶大なる自信である。(以下次号)

引用文献

- 1) 溝田武人、荒瀬病院旧邸代主に関するある伝聞について、巴杏、三次地区医師会会報、No.164、pp.21-26、2018.10
- 2) げいびグラフ、巻頭人物風土記、荒瀬秀俊、(株)菁文社、第44号、昭和61(1986)年7月5日発行
- 3) 支局ノート、戦争の不条理伝える抑留所<三次>、中国新聞北部版p.27、平成12年、2000.9.8
- 4) 米丸嘉一、戦時中の三次捕虜収容所について－オランダ国立公文書館文書から－：三次地方史、第54号、2000.9.20三次地方史研究会発行
- 5) 平和を考える、三次英米人抑留所の貴重な写真、欧米流の交流の礎に、朝日新聞広島版、2009(平成21年)10月7日
- 6) 三神國隆、海軍病院はなぜ沈められたか－第二氷川丸の航跡－、光人社、ISBN4-7698-2443-2 c0195、2005.1.15
- 7) 「つらかった収容所の生活」オランダ人元捕虜32年ぶり三次訪れる、中国新聞、昭和53(1973)年1月29日
- 8) 朝刊コラム、ほのぼの欄、国境越えた良心のメス、中国新聞1990.2.2、p.26
- 9) 20世紀スポット、②三次の抑留所・捕虜収容所、戦時下に園舎が変ぼう、国境を越えて交流芽生える、中国新聞、平成12年、2000.8.29
- 10) 贅澤な“海の病院”、皮肉や自国の捕虜を満載輸送、抑留下の和蘭病院船、朝日新聞、昭和17(1942)年4月2日



手術室で執刀中の荒瀬秀俊(眼鏡着用)、左端が児玉ハズエ看護婦長